



Title	文学作品を読むのは誰か? : 読者論 と”intertextuality”
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 23-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69889
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

文学作品を読むのは誰か？

——読者論と“intertextuality”——

伊勢 芳夫

1. はじめに

数十年前、日本でもヴォルフガング・イーザー（Wolfgang Iser）の「読者論」¹が流行ったことがある。その後2007年に亡くなったイーザーの名前もほとんど聞かれなくなったが、「読者論」の考え方の基底にあるものが有効性を喪失した、そもそも真剣に考えるほどのものではなかったということではなく、むしろ今日の外国文学研究において自明のこととして浸透している感がある。例えば、中国からの留学生が村上春樹やカズオ・イシグロの作品を取り上げて、修論、博論を書いているプロセスに立ち会う場合、日本人の指導教員は自己の読みとの「ずれ」を実感するであろう。また、今日盛んになってきた翻訳研究において、基点言語から目標言語への翻訳の過程において、「読者」というものが重要なファクターとみなされている。文学を論じるということにおいて、今日のグローバル性とローカル性のせめぎ合う状況、ポストコロニアル状況において、読者が何を読んできたか、あるいは、どのような思想、イデオロギーの流通している中で読書をしているかによって、同じ作品もいろいろな顔を持つということを、普遍性の名のもとに隠蔽し続けることは難しいであろう。

本論で取り上げるテーマは、文化研究が文学研究に果たす役割と働きについての検証である。従来の文学研究が文学史の流れに沿った“intertextuality”の研究に限定されていたものを、同時代の文学作品だけではなく様々な情報媒体との関係、そして政治とのかかわりにおける“intertextuality”を含める方向での研究を行うことによって、何が「見えて」くるかという考察を行う。

芸術作品全般についていえることであるが、制作者と受容者の協働作業によって作品は完成する。たとえば、単なる包装紙替わりであった浮世絵が、そこに芸術性を見出す受容者に遭遇することによって芸術作品になったことは芸術史上の周知の事実である。そして制作者と受容者の協働作業が重要な芸術作品の中でも、知覚に訴えることのない文学作品は、作品に芸術性を見出す以前の、作品自体の制作段階に受容者を引き込む必要がある。

¹ たとえば、Wolfgang Iser, *The Implied Reader* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1974)を参照。

たとえば、サンスクリット語を全く解しない受容者にとって、『バガヴァッド・ギータ』の原典に書かれた文字は、直線や曲線からなる複雑な文様にしか見えないであろう。

このように文学作品は、他の芸術媒体に比べても、制作者（作家）と受容者（読者）との協働作業を大いに必要とする芸術媒体なのであるが、その協働作業は極めて重層的であり、制作者と受容者の関係においては、見た目には協働作業がうまく働いているようであり、結果的には制作者の意図とは全く違った作品になる場合がある。もちろん、他の芸術媒体においても作品の評価は受容者によって大きく変わることは往々にしてある。すでに触れた浮世絵は、その制作者が意図した受容者によって一時的な喜びを得るものとしてみなされていたものが、文化・歴史の全く異なったコンテキストに生きる受容者によって、伝統的な西洋絵画の世界に新たな芸術的可能性を切り開く触媒として受け入れられたのはその一例であろう。しかしながら、「版画」という視覚媒体についていえば、江戸時代の受容者に対しても、19世紀の西欧人に対しても、はたまた21世紀の我々に対しても、それが与える視覚情報が変わることはなく、その視覚情報によって喚起される「意味」や、その意味に付随する「価値」が変わったのである。一方言語媒体の芸術作品の場合は、描かれる世界に対する見方が変わるだけでなく、言語媒体の構成要素である「語」の意味、そしてその意味に付随する価値観も変化するために、受容者によって「完成」された作品自体が違ってくるのである。明治時代初頭に流布した「丁髷と散切り頭」という旧時代と新時代を表すメタファーが、今日ではいずれも旧時代を示すものになっていて、歴史的知識を持っていれば頭では理解できるのではあるが、「彼は散切り頭をしている」ということを聞いても、新時代の人間であると感じ取ることは到底できないのである。

そして、“intertextuality”の問題である。作品の受容者が読書を行うまでに、音声媒体を含めどのような言語媒体から情報を得てきたかによって、読書を通して完成される「作品」の姿が違ってくる。たとえば、「同性愛」に対する意味がここ数十年の間に世界的に変化が起こっており、今日「同性愛者」を登場人物にする小説に対する忌避感がこれまでよりも薄れているだろうし、一方その描き方によっては、その作品自体が同性愛者に対して差別的だと判断されるかもしれない。このように、短歌の枕詞のような場合を除き、文学作品はその構成要素である「語」を他の言語媒体と共有している関係にあり、読者がどのような“intertextuality”を使って「作品」を完成させるかによって、その形はかなり違ってくるといえるのである。

筆者は、これまでの共同研究プロジェクト報告書において言説編成の転換について論じてきたが、²今回の共同研究プロジェクト報告書においては、作品／読者との関係性において作品と同時代の著作間の“intertextuality”の観点から考察した作品／読者の共創のメカニズムの観点から、読者が選択する“intertextuality”による完成された「作品」の多様性について

² 「言説形成と歴史性——「キャノン」と「ポピュラー」——」（ポストコロニアル・フォーメーションズ X、2015）、「文化の拘束力についての一考察——「意味」の変質のメカニズム——」（ポストコロニアル・フォーメーションズ XI、2016）、「情報操作と言語空間——二つの軍事裁判——」（ポストコロニアル・フォーメーションズ XII、2017）を参照。

て論じる。

2. 「帝国主義」という語の変遷について

今日では否定的な含意を持つ「帝国主義(Imperialism)」は、どのような意味の変遷を経てきたのであろうか。もちろん、保守から革新までの思想的隔たりのある人間社会において、「帝国主義」の意味の変遷が複数の流れを辿っていったことは想像がつくであろうが、特に注目すべきなのが、19世紀から20世紀への時代の転換点あたりからヨーロッパにおける帝国主義批判の言説形成が起こってくることである。その言説形成は、ベルギーのコンゴ植民地の惨状を描いたジョゼフ・コンラッド (Joseph Conrad) の『闇の奥(*Heart of Darkness*)』(1902)、コンラッドとフォード・マッドクス・フォード(Ford Madox Ford)共作の前衛的な小説で、アイスランドの植民地における醜聞を推理小説とSFの枠組みを使って描いた『後継者たち(*The Inheritors*)』(1901)などの小説や、「帝国主義」批判の陣営の最先鋒であったJ・A・ホブスン(J. A. Hobson)の『帝国主義論(*Imperialism: A Study*)』(1902)という経済的な側面を中心とした著作が生み出されていった。しかしながら、これらの著作においては侵略的な領土拡張や労働力搾取に対して極めて批判的である一方で、白人優位性、サイド的オリエンタリズム、人種的ヒエラルキーの残滓が残存していることは否定できない。³

つまり、T・B・マコーリー (T. B. Macaulay) の影響は英語の言説編成、あるいは、欧米の白人のコミュニティを覆う言説編成において、『闇の奥』の最後にヨーロッパを包む“Darkness”のように今だ力を失うことはなく、「帝国主義」批判への転換は、20世紀初頭の時点では局所的に始まったばかりであり、長い時間をかけてそれらが統合され、エメ・セゼール(Aimé Césaire)、フランツ・ファノン (Frantz Fanon)、エドワード・W・サイド(Edward W. Said)などの登場によって、ついには大きなうねりとなって言説編成の大変革が生み出される20世紀後半を待たなければならない。

上に挙げたホブスンは、大英帝国の帝国主義に協力したイギリス人の動機に関して、「大多数でないが無視できない数の国民」が、「異教徒にキリスト教を広め」、非西欧圏に存在すると考える「残虐性や他の苦しみ」を減らし、人類のために貢献したいと真摯に望んでいるという。⁴また有名な話として、ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill)の『自由論(*On Liberty*)』(1859)の中で、「その目的が野蛮人を改善することであり、その手段が改善の目的に実際に適っているのであれば、専制政治は野蛮人を統治する正当な統治方法である。」⁵と述べているように、発展途上の地域においては独裁制を認めていたのである。

すでに述べたようにホブスンは経済的・労働的搾取を行っているイギリスの帝国主義的

³ 『闇の奥』に対するナイジェリアの作家チヌア・アチェベ(Chinua Achebe)による人種主義批判、や、『帝国主義論』における優生学の影響をみれば、これらの著作においても白人優位性、サイド的オリエンタリズム、人種的ヒエラルキーが克服されているとはいえない。

⁴ J. A. Hobson, *Imperialism: A Study* (New York: James Pott & Company, 1902, rpt. by ULAN Press), p. 208 を参照。

⁵ John Stuart Mill, *On Liberty* (London: Longmans, Green, and Co., 1921), p. 6b を参照。

拡張を激しく断罪したが、彼もまた『帝国主義論』において括弧つきながらも「劣った人種(lower race)」に社会の安定と進歩をもたらすことに真摯に貢献するならば帝国主義も肯定されるとしている。実際の植民地統治においては資本家による経済的搾取が帝国主義国家の領土的拡張の隠された原動力であるので歴史的に展開してきた帝国主義は否定すべきものであるというのが彼の一貫した主張なのだが、理論上は帝国主義を容認する可能性の余地を残していることになる。ここで前提になっているのは、地球上には「優れた人種」と「劣った人種」が存在しているということである。この優劣が生物学的進化によるとまで考えていなくとも、社会的進化の進み方には遅速があるという考え方であり、19世紀を通してこの信念は強固になっていったと思われる。たとえば、インドにおいて18世紀まではヨーロッパ人とインド人の婚姻はそれほど抵抗感がなかったのが、19世紀になると忌避されるようになっていく。このような信念を強化していった要因として、近代化された軍隊と兵器によってもたらされた西欧諸国と非西欧諸国の軍事力の格差の拡大による優越感、そして占領統治により、被植民地社会の因習や暗部に関する情報の流通・拡散による非西欧社会に対する蔑視があるだろう。確かに被植民地地域に残る女兒嬰兒殺しや首狩りのような習慣を肯定できないとしても、近代化された社会にも暗部があり、「まなざし」を向けられる側の社会の因習をことさら取り上げてその社会全体を評価するのは一方的であろう。しかしながら、19世紀から20世紀にわたる西欧帝国主義の時代は、そのような信念が、保守であろうと革新であろうと広く浸透していたのであった。そして、早く進化(近代化)した社会の住民が、進化(近代化)の遅れている社会の住民を啓蒙するのは正しいことであり、それをしないのはむしろ怠慢であり非難されるべきだという考え方がドミナントであったのだ。

このように、20世紀初頭において帝国主義を批判する人でさえ、純然たる啓蒙活動を目的とする植民地化は必ずしも否定できるものではないと考えていたといえる。一方、帝国主義を支持する人々も、あからさまな人的・経済的搾取を目的として帝国主義的拡張を唱道していたわけではなく、やはり「文明化の使命」を理念としていたのである。一般的に言って、「本音」と「建前」は表裏一体の関係にあり、「白人の責務」と有色人種からの人的・物的搾取も一種の「合板」構造を形成していて、簡単に両者をはがすことはできない。言い換えれば、「文明化しつつ搾取する」というのが帝国主義の下での植民地政策の実態であったと思われる。

しかしながらこの「文明化の使命」という理念(建前)が全く変化しなかったというわけではなく、19世紀から20世紀の転換点にあるイギリスでは、「劣った人種」に一元的な統治制度を押し付けることはリベラルの精神に反するという意識が生まれてきたことで、統治の仕方が変化してきているとホブソンは言う。⁶その点について、英領インドの行政官であったヘンリー・コットン(Sir Henry Cotton)も、20世紀初頭に著した『新インド (New India or India in Transition)』でイギリス人による一方的なインド統治をやめ、いわば「インド合衆国」

⁶ J. A. Hobson, *Imperialism: A Study*, p. 258 を参照。

というようなイギリス人とインド人による共同統治を提唱している。⁷一方、ホブソンは台頭してきたアメリカの帝国主義には、『出来合いの(canned)』文明を異教徒にもたらそうとする使命感を持っている」という非難が依然としてであると、間接的な言い方だが、アメリカ帝国主義の後進性を指摘している。⁸

ホブソンは、西欧の民主主義というシステムが優れたものであるとしながらも、リベラル知識人の心の中では非西欧社会の伝統文化や歴史を無視して西欧システムを押し付けるという考えが薄れてきていると指摘し、そのような意識から、西部フロンティア開拓が終了し勢力を海外へと拡張しようとする新興帝国主義国のアメリカへ冷ややかな視線を向けているといたいのだろうが、ある意味で、19世紀初頭のマコーリーら啓蒙主義者たちの自信に満ちた西欧優位主義から、凋落期に入った大英帝国の現状の反映といえるかもしれない。

このように19世紀から20世紀への転換点において、帝国主義は一部の革新的な知識人からの批判を受けることになったが、しかしながらその批判の矛先は資源・労働力の搾取なのであって、啓蒙主義から行われる帝国主義があるとすれば、それは肯定されるものであるとする言説はいまだ厳しい批判に晒されることはなかった。たとえ被植民地の歴史や文化を無視して一方的な「西欧流」を押し付けることに対する反省を一部の知識人が持っていたとしても、である。この背景にあるのは、すでに指摘したように、近代化による軍事力・産業力の絶大な格差に対する驕りとともに、非西欧社会に対する文化観であろう。「野蛮な風習」が非西欧社会にはびこっているという異文化観である。たしかに、インドにはサグ(thug)のような職業的強盗集団や、サティー、女兒嬰兒殺しが存在したことは確かだし、台湾の先住民には首狩りの習慣があった。そこに野蛮で未熟な社会を文明化するという「白人の責務」という観点が生まれ、正当化されるのであろう。また非西欧圏でいち早く近代化した日本が、「文明国の一員」になろうとして台湾を文明化することに意欲を持ったのもこのような「西欧」の反復である。しかしながら、本当に文明化しないといけないほど「野蛮」であったのであろうか。19世紀以降、そのような非西欧圏の「野蛮性」を流通させたのは西欧語であり、西欧の視点から一方的に表象されたものである。もしかすると、異文化のはざままで起こったことであり、通常は西欧社会並みに非西欧社会も平穏な社会であったかもしれない。あるいは、一部の「野蛮」な風習が拡大解釈されたのかもしれない。このような非西欧表象は、西欧の言説が世界を席卷している状況においては反論するのが困難な事柄であった。

3. キプリング作品への「帝国主義」の反響

ラドヤード・キプリング(Rudyard Kipling)は、幼少期と、新聞社に勤めながら短編小説や

⁷ Henry Cotton, *New India or India in Transition* (London: Kegan Paul, 1907, rpt. Bibliobazaar), p. 242 を参照。

⁸ J. A. Hobson, *Imperialism: A Study*, p. 258 を参照。

詩を執筆した16才からの7年間をインドで暮らした。つまり、上記に説明した「帝国主義」の意味が多層的に分かれる直前の時代を実際の大英帝国最大のインド植民地で生きたことになるのである。はたして、同時代の「帝国主義」言説が彼の作品に木霊しているのだろうか。次にキプリング作品と帝国主義との関わりについて、“intertextuality” 的關係性の観点から検証してみよう。

まずキプリングといえば「帝国主義」のレッテルであるが、そのような社会状況にあつてキプリングが「帝国主義」の代弁者であつたことは、思想のスペクトラムのなかで「保守」の部類にあつたのであるから当然だといえる。問題は、彼が経済的・労働的搾取を容認していたかだ。“Recessional”や“The White Man’s Burden”などのキプリングの詩から、「搾取容認論」を読み取るのは、極めてアクロバティックな脱構築でも難しいであろう。“Recessional”は過去の大英帝国の栄誉が神の前でも恥ずかしいものではないという詩であり、「帝国主義」を肯定するものであり、恥ずべきものとは考えていない。“The White Man’s Burden”の方は、フィリピン植民地を獲得したアメリカ合衆国の大統領テオドール・ルーズベルト(Theodore Roosevelt)に「白人の責務」を教えようと送った詩であり、この詩には“Your new-caught, sullen peoples, / Half devil and half child”からたとえ感謝されなくとも犠牲的な精神で文明化することが白人の責務であるといった、常套的な文明化の理念がうたわれている。

また、*Something of Myself* というキプリングの自叙伝におけるイルバート(Ilbert)法についての記述から、20世紀のリベラルの考え方には批判的であつたとしても、周りのアングロインディアンからの非常に強い影響／威圧を受けていたことなども斟酌できるだろう。⁹したがって、キプリングが「帝国主義」の広告塔に率先してなつたとまでいえるかは、それほど単純ではない。

次にキプリングの代表作である『キム(Kim)』と、文字通りの大英帝国のイデオロギーを次世代に鼓舞したG・A・ヘンティ(G. A. Henty)の『銃剣の切っ先：マラータ戦記(*At the Point of the Bayonet: A Tale of the Mahratta War*)』と比較してみよう。¹⁰ヘンティは、大英帝国の全盛期に少年向けの小説を量産した作家で、彼はインドには短期間の旅行しかしていないが、その代わりに、世界各地のイギリスの植民地を旅行しており、一種のコスモポリタンであつた。

ヘンティの『銃剣の切っ先』には、ほぼ同じ時期に出版された『キム』の主人公といくつか共通点を持つ主人公ハリー・リンゼー(Harry Lindsay)が登場する。この作品と『キム』との共通点は、主人公が幼いころに親と死別しインド女性に育てられたこと、現地語を流暢に話しさまざまな階層のインド人に変装して諜報活動をすること、そして、イギリスのインド支配の安定のために活躍するという点である。しかしながら違いもある。『銃剣の

⁹ Rudyard Kipling, *Something of Myself* (New York: Charles Scribner’s Sons, 1937), pp. 49-51 を参照。

¹⁰ 以下の論考は、「言説形成と歴史性——「キャンノン」と「ポピュラー」——」(ポストコロニアル・フォーメーションズ X, 2015)の一部を使用している。

切っ先』が 18 世紀末から 19 世紀にかけての東インド会社の勢力拡張の時期を舞台にしているのに対して、『キム』が 1880 年代という絶頂期の英領インドを舞台に取っていること。彼らの親は、キムの父親がインドで身を持ち崩した元アイルラン人兵であるのに対して、ハリーの方はマラータの急襲で夫婦ともども殺されたイギリス人士官の息子であったこと。キムがインドの母なる大地に固執するのに対して、ハリーの方は、オランダの勢力圏にあったマレー半島に触手を伸ばすことを目論むイギリスのお先棒を嬉々として担いで、シンガポールまで乗り込んでいくのである。

被植民地の文明化と資源・労働力の搾取は合板構造をなしている、つまり 19 世紀を通して「文明化しつつ搾取する」ことが帝国主義的拡張と植民地政策を推進してきたと先述した。文明化／啓蒙も搾取も、当然のことながら絶対的な白人優位を前提としている。もし啓蒙することによって文明社会にすることが純粋な目的であるのなら、「野蛮」から脱した時には対等の人間として接することになるであろう。つまり、「搾取」が意識的にも無意識的にも植民地支配の大義に入り込んでいなければ、「文明化／啓蒙」を過渡的なものとして受け止めているはずであろう。その意味で、白人としての「立ち位置」が重要なのである。そしてこの「立ち位置」についての意識がどのように作品に反映されているかで、作品の帝国主義・植民地イデオロギーの濃度を測定できる。いわば、そのイデオロギーの強弱を図るリトマス試験紙といえるのだ。

この「立ち位置」の問題は、『キム』批評では、キムとインド人及びラマとの関わりについての当初からの重要な論点であった。たとえばエドマンド・ウィルソン (Edmund Wilson) は、相対的な異文化並置を指摘し、“dissociating himself from the hierarchy represented by the Abbot-Lama, he commits himself to a role in the hierarchy of a practical organization”¹¹と断言する。

このウィルソンと同じ線上にある批評家として、たとえば、ジョン・A・マクローア (John A. McClure) はキプリングが“the commonplace identification of the Indians with children who must remain under protective custody”¹²という当時の考えを受け入れ、強調しているのだという。

パトリック・ウィリアムズ(Patrick Williams)は、ポスト構造主義的方法、つまりディコンストラクションによって、テキストに内在するイデオロギーを、「沈黙」、「矛盾」、そして「一貫性の破綻」している箇所を見つけ出すことによって暴き出そうとする。ただし、彼の見つけ出そうとするイデオロギーは、明らかに帝国主義・植民地主義イデオロギーであり、キプリングがいかにかに東洋を理解しようとしたかではない。確かに、ディコンストラクション的方法が内在するイデオロギーを浮かび上がらせることは否定できなく、有用な方法であ

¹¹ Edmund Wilson, “The Kipling that Nobody Read”, in *Kipling’s Mind and Art* ed. Andrew Rutherford (London: Oliver & Boyd, 1964), p. 31.

¹² John A. McClure, *Kipling and Conrad* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1981), pp. 23-4.

るが、テキストの「沈黙」の箇所からイデオロギーを読み取る作業には、常に研究者の恣意的な解釈を生み出す危険性がつきまとっていることも確かである。

そのような方法論によって、ウィリアムズは前述のウィルソンやマクルーアと同様、『キム』が“the possibilities of bridging the gap which separates coloniser and colonised”¹³をキムというアイルランド少年を通して模索していると主張する立場を否定して、まさに『キム』というテキストこそが、揺らぎ出した大英帝国の白人優位のイデオロギー的基盤を立て直す新しいヴィジョンを提供する目的で書かれたというのである。

それでは、ヘンティの『銃剣の切っ先』の方はどうであろうか。ディコンストラクションという手法に頼らずとも、イギリス人（白人種）の優位性、植民地化の大義、植民地化以前の旧支配者の邪悪性の誇張的表現、インド人一般民衆の従順性が、この作品のなかで繰り返し反復されていることは明白であろう。

イギリス人の立ち位置に関していえば、『キム』という作品は極めてアンビギュアスである。冒頭で小説の全知の語り手は、ザム・ザマ（Zam-Zammah）と呼ばれている大砲にまたがるキムが英領インド社会にあって特別な存在であることを高らかに宣言している。しかしながら、キム自身からは、例えば彼の父親がかつてアイルランド人の部隊に所属していたことを聞いたときにも、また聖ザビエル校に在籍していた時も、また物語の最後においても、インド人社会から離れようという素振りは見せず、むしろそこに帰っていくことを強く望んでいるように描かれている。一方、キムと同様にインド人として育てられていたハリーが、母親であると思っていたインド女性から彼がイギリス人であることを初めて聞かされた時のこと、自分がイギリス人だと知った瞬間に、“he might some day have to join them and leave all those he loved behind”だと思うのである。おそらくキプリングやヘンティの作品に帝国主義・植民地主義イデオロギーを読み取ろうとする研究者は、ハリーの方の反応が「自然」に感じるかもしれないが、リアリズムの観点からいえば、自分がイギリス人であると知った瞬間にハリーのように思う方がはるかに「不自然」であろう。確かに『銃剣の切っ先』の記述には、愛するインド人と別れることになることの悲しみは書かれているが、少年にとって自己のアイデンティティが覆されることの衝撃は決して小さいものではなく、単なる悲しみ以上のものであろう。しかしながら、ハリーの反応を「自然」であると感じるのは、この作品が出版された20世紀初頭の“intertextuality”のネットワークに絡めとられた読書から生まれる評価であり、そのネットワークを使った批評によるものである。そのような批評の読みにおいては、今日の人間の心理についての認識に基づけば「自然」にみえるキムの反応も、むしろキプリング作品としては「不自然」であり、そこに帝国主義・植民地主義イデオロギーが「隠蔽」されていると分析されるのである。

このように「白人優位の立ち位置」は、『銃剣の切っ先』の場合は明示され、『キム』の場合は「隠蔽」されているということになる。そのような評価が正しいかどうかは判断

¹³ Patrick Williams, “Kim and Orientalism”, in *Kipling Considered* ed. Phillip Mallett (Macmillan, 1989), p. 35.

が分かれるところであるが、たとえ正しいとしても、『キム』の場合には明示を避け「隠蔽」するという力が働いていることになる。ではその場合、この隠蔽する力とはどこからきているのであろうか。

批評家が『キム』という作品に躍起になって「沈黙」、「矛盾」、そして「一貫性の破綻」している箇所を探し出し、何とか『キム』を『銃剣の切っ先』と同列の作品に引きずり込もうとする。しかしながら、たとえば主人公の西欧人的性格をとってみても、ハリーが肌を黒くして額にカーストのマークを付けた現地語を流暢に話す純然たるイギリス人の性格をもつ青年であるのに対して、キムの方は、蛇を見たときや、ラマ僧がロシア人に殴られたときにしか、アイルランド人の「血の特性」が現れないのである。

だからと言って、キプリングが「東」と「西」、あるいは西欧人と非西欧人という2項対立の構図を突き崩した作家ということではない。そもそも「他者」表象についていえば、キプリングは極めてアンビギュアスである。小説家キプリングが登場するまで、彼ほど非白人を「他者化」したイギリス人作家はいなかったと同時に、彼ほど非白人を真摯に表象しようとしたイギリス人作家もいなかった。キプリング以前のアングロインディアン作家は、インドの風景の一部、あるいは、ステレオタイプ化した薄っぺらな人物として、または顔を黒く塗った白人のようなインド人としてしか描いていないが、キプリングは、非白人としての複雑な人物造形を施した「インド人」表象を作り上げている。これはインド人ではないが、チベット人のラマ僧の人物造形に関していえば、マーガレット・ペラ・フィーリー (Margaret Peller Feeley) は、ブリティッシュ・ライブラリー所蔵の草稿「キム おお、リシュティ(“Kim O, the Rishti”)」と比較して、『キム』のラマ僧の人物造形が最初はステレオタイプのアジア人表象であったものが、作品を完成させる過程で複雑なパーソナリティを持つ人物へと変貌させていったと分析している。¹⁴一方キプリングは、“Beyond the Pale”¹⁵や“To be Filed for Reference”¹⁶にみられるように、異人種・異文化との壁を強調し、それを無謀にも乗り越えた白人は危険な目に合う、もしくは零落した生活を送る物語を書いた作家でもあった。ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)は、日本滞在中のキプリングの鎌倉の大仏に関する短文と詩をバジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain) への1892年12月12日付けの手紙のなかで“*But then Kipling is a giant in all things compared to me. [...] I despair when I read that man’s work.*”と絶賛している。¹⁷おそらく、ハーンがこのように激賞したキプリングは、非白人を真摯に表象しようとした「キプリング」なのであろう。

“The Ballad of East and West”は、上記のような異人種・異文化にたいするキプリングのアンビギュアス性が表れている詩であろう。“Oh, East is East, and West is West, and never the

¹⁴ Margaret Peller Feeley, “The *Kim* that Nobody Reads”, in *Rudyard Kipling’s Kim* を参照。

¹⁵ Rudyard Kipling, “Beyond the Pale”, *Plain Tales from the Hills* (New York: Charles Scribner’s Sons, 1907), p. 189 を参照。

¹⁶ Rudyard Kipling, “To be Filed for Reference”, *Plain Tales from the Hills* (New York: Charles Scribner’s Sons, 1907), pp. 346-8 を参照。

¹⁷ Lafcadio Hearn, *Life and Letters, vol. III*, ed. Elizabeth Bisland (Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1922), p. 347 を参照。

twain shall meet,/Till Earth and Sky stand presently at God's great Judgment Seat”と「東」と「西」が全く相いれないことをリフレインしながらも、“But there is neither East nor West, Border, nor Breed, nor Birth,/When two strong men stand face to face, though they come from/The ends of the earth!”(下線筆者)と、「理解」の余地も残している。もしキプリングが、“To be Filed for Reference”のマッキントッシュ・ジェラルディンとともに、“The Ballad of East and West”の“two strong men”のうちの一人である大佐の息子を自身の分身であると意識しているのだと考えると、*From Sea to Sea* の彼の言葉“I thought of India, maligned and silent India, given up to the ill-considered wanderings of such as he[globe-trotter]—of the land whose people are too busy to reply to the libels upon their life and manners. It was my destiny to avenge India upon nothing less than three-quarters of the world.”(下線筆者)¹⁸で何を言おうとしているのかがわかるような気がするのである。多少飛躍的な見方をすると、同じ帝国主義者といっても、前述のヘンティのような作家は今日の「グローバリズム」の先駆けと考えてもいいのに対して、キプリングの方は、「ローカル性」を強く意識した「帝国主義」作家といえるのかもしれない。

キプリングが非白人を他者化しようとしたのかそれとも代弁／復讐をしようとしたのかの判断は別れるところであるが、良かれ悪しかれ、キプリングの文学的才能は擬人化の妙手、つまり、犬や狼から、機関車までも語らせる卓越したテクニックであろう。ひょっとすると、この擬人化の変種として、インド人やチベット人に語らせているのかもしれない。このようなキプリングの擬人化の能力の評価は、それが単なる腹話術なのか、それとも、代弁・表象であるのかで良し悪しが決まってくるだろう。19世紀の白人男性優位の帝国主義の時代にあって、「語れない」ものの代弁者として、彼らの「声」になっているのであろうか、それとも、白人優位主義にとって都合の良いことをしゃべらせているだけなのであろうか。「女性」に語らせることはできたのであろうか。19世紀から20世紀への転換点の新旧の“intertextuality”のはざまにあって、セミがさなぎの殻を破って新たな姿を現そうとするように、キプリングは20世紀の先駆けとなったのであろうか。それとも、古い殻が抜け落ちないようにしっかりとつかんで離そうとしなかったのであろうか。

本論においては、「あれかこれか」を決着させようとは考えていない。むしろ「二重人格性」こそがキプリング作品の最大の特徴であると、提起したいのである。

4. おわりに

キプリング作品は、そのアンビギュアス性によって読者の先入観と呼応し、帝国主義を読み取ろうとする読者には格好の標的になり、サイド的オリエンタリズムの理想的な標本となる一方、自分たちの記憶の風景を見事に再現してくれる作品として愛読されたり、周辺におかれた人々や動物、機械に至るまで、それらの良き理解者としてのキプリングが見

¹⁸ Rudyard Kipling, *From Sea to Sea*, Part 1 (New York: Charles Scribner's Sons, 1906), pp. 231-3.

いだされることにもなる。いわば阿修羅像のようでもあるが、興福寺の阿修羅像のように、すでにそこに現前しているモノが読者の見る角度で違って見えるのではなく、「はじめに」で述べたように、文学作品においては、その「阿修羅像」は作品と読者の協働作業によって生まれるものである。そして読者が複眼的な読み方をすればするほど、作品は様々な「顔」を持つことになるであろう。

ステレオタイプでないということが、必ずしも異文化を好意的に描くことになるとはいえない。表面的に新しい衣装をまとっているからといって、実態は革新的でなく守旧派かもしれない。真実を知りながら、それを必死で隠そうとするかもしれない。あるいは中身のない作品が、読者の想像力によって豊かな作品に生まれ変わるかもしれない。このように作品を仕上げるのは読者の作業である。その意味で、文学作品は読者を映す鏡といえる。